

オンライン・コミュニティにおける 実名とハンドルの名乗り傾向 : NIFTY-Serve 心理学フォーラムの事例

折田明子^{†1} 三浦麻子^{†2} 森尾博昭^{†3} 宇田周平^{†1}
田代光輝^{†4} 鈴木隆一^{†4} 松井くにお^{†4}

本稿では、パソコン通信サービス NIFTY-Serve の掲示板ログを対象に、オンライン・コミュニティにおける名乗りの傾向を探索的に検討した。NIFTY-Serve ではハンドルを使ったコミュニケーションがなされており、実名をそのまま利用したりニックネームを設定したりする他、すべての掲示板を通じて同じ名前を名乗ったりその都度変えたりといった使い方が可能であった。本稿では、心理学フォーラムの掲示板を対象に、特にアクティブな利用者がどのような名乗りの傾向を示しているか、予備的な分析結果を報告する。

Trend of Screen-name Usage on Online Community :A Case of NIFTY-Serve Psychology Forum

Akiko Orita^{†1} Asako Miura^{†2} Hiroaki Morio^{†3} Shuhei Uda^{†1}
Mitsuteru Tashiro^{†4} Ryuichi Suzuki^{†4} Kunio Matsui^{†4}

This paper tried to examine a trend of screen-name usage on online community- NIFTY-Serve. NIFTY-Serve are thought as a "pseudonymous" community because of handle-based communication, however, this service allowed users to choose some options for their screen-names. As long as linked to a registered ID, users are able to choose either real name or nick name. In this paper, we reports our exploratory analysis on the psychology forum data.

1. はじめに

インターネット上には、共通の興味関心に応じて複数の個人同士が情報を発信あるいは受信できるオンライン・コミュニティがつくられてきた。これらのサービスの利用にあたっては、日本では匿名指向の利用が主だととらえられてきた。2007年のインターネット白書では、回答者の60.9%がオンライン・コミュニティに匿名で参加していると回答しており[1]、実名を秘匿する傾向があることが読み取れる。

近年では、実生活上の人間関係を基にしたソーシャルネットワークワーキングサービス (SNS)をはじめとするソーシャルメディアの利用によって、個人の持つ知識や情報の共有や交換がなされている。これらのサービスは、会員登録を必要とし、実際の人間関係に基づいた紹介を行っているため、実名を秘匿していたとしても、同一人物による投稿であると識別されたり、人間関係から現実のアイデンティティが

推測されたりなど、匿名性が高いとは言えない。ただし、こうした傾向はソーシャルメディアに限ったことではなく、たとえば日本のネットニュース fj*では、ハンドルの利用も許容はしつつも、基本的には本名や所属を名乗ることをルールとしていたなど[2]、これまでのオンライン・コミュニティにも見られたものである。

一方で、複数のIDを取得できたり、その都度ハンドル(ニックネーム)を変えて投稿できたりする掲示板やQ&Aサイトもあり、異なるアイデンティティを使い分けた上でのコミュニケーションの機会も存在している。オンラインでどのような名前を名乗るか、あるいは同じ名前を名乗り続けるかその都度変えるかというふるまいは、コミュニケーションにおいて自分のアイデンティティを文脈ごとにどのように扱うかを表しているといえるだろう。

本稿では、長年にわたり多数の利用者を集め、多様な話題のフォーラムを運営してきたパソコン通信サービス NIFTY-Serve (以下ニフティ) の電子掲示板「会議室」のデータを対象に、名乗りの傾向を探索的に明らかにする。ニフティの電子掲示板アーカイブデータは、利用者ごとにIDが割り当てられており、掲示板ごとあるいは投稿ごとにハンドルや実名といったように名乗る名前を変えたとしても、同一人物としての識別が可能である。そのため、同一掲示板内での名乗りの傾向と、同一人物が複数の掲示板においてどのように名乗り分けるかという傾向を明らかにすることが可能である。本稿で対象とするのは、これまで、

^{†1} 慶應義塾大学
Keio University

^{†2} 関西学院大学
Kwansei Gakuin University

^{†3} 関西大学
Kansai University

^{†4} ニフティ株式会社
Nifty Corporation

三浦らがダイナミズムという観点で分析を行った[3]心理学フォーラムの電子掲示板(会議室)のデータである。このフォーラムにおいて、特にアクティブな利用者がどのような名乗りの傾向を示しているか、予備的な分析結果を報告する。

2. 「ニフティ」というオンライン・コミュニティ

2.1 ニフティ概要

ニフティとは、ニフティ株式会社によって1987年4月から2006年3月まで約19年にわたって運営された商用のパソコン通信サービスである。電子メールの送受信や電子掲示板、チャットといった機能が提供されていた。

ニフティに会員登録すると、固有の接続アカウント(ID)が発行され、サーバへのログイン時にはパスワードと共に入力することが求められた。サービス開始から1997年10月までは、電話回線を經由してニフティ独自のアクセスポイントに接続するのが一般的であったが、その後は、インターネット経由の接続が可能になった。利用者数は、1995年4月に100万人、1996年9月に200万人に達した後に横ばいになり、その後利用者は減少していった。

ニフティのフォーラムには「お知らせ」「掲示板」「電子会議」「データライブラリ」「会員情報」「リアルタイム会議(チャット)」「SYSOP宛メール」の機能がある。本稿が分析対象としているのは、「電子会議」に開設された会議室への投稿のログデータである。フォーラムの「電子会議」には最大20個(初期には10個)までの会議室を作ることができ、各会議室が扱うテーマはフォーラムマネージャーやシステムオペレーター(SYSOP; シスオペ)と呼ばれるフォーラム管理者が設定していた。

会議室におけるコミュニケーションでは、ある発言(投稿)に対して、コメント(レス)を就けるツリー型の構造を取っていた。投稿した発言は、本人かシスオペが削除できたが、本人による削除はコメントがついていない場合に限られた。

2.2 ニフティにおける名乗り

ニフティでは、利用者同士でコミュニケーションをはかる際には、ハンドル(ニックネーム)を設定することができる。初期値は各人のユーザIDあるいは本名を公開する場合には本名となるが、必ずしも本名を明かす必要はない。しかしニフティのIDの付与ルールから、IDを見ることで古くから会員なのか、最近加入したのか、またどのような入会経路をたどっているかがある程度分かることもあった。

初期値に関わらず、ニフティでは本人の希望により、任意のハンドルを設定することができる。どのような名前を名乗るかは、フォーラムごとに設定が可能であった。同一の

ハンドルで複数のフォーラムを使うことも、フォーラムごとにハンドルを変えることもできる。1995年からは、複数のフォーラムでコミュニケーションを図る利用者の利便性を考慮し、どのフォーラムでも一貫して使うことができるグローバルハンドルが導入された。ただし、フォーラムごと、あるいは会議室内でハンドルを変えることは可能であった。

また、IDに対してはプロフィールを登録することができ、会員同士が読むという前提で、会員の自己紹介や近況を参照することもできた。

2.3 ニフティに関する研究

これまでのニフティを対象としたオンライン・コミュニケーションの研究では、内容分析や発言のつながりから、コミュニティやネットワークの形成過程、および社会的なコミュニケーションの変化に関する分析が行われてきた。こうした分析において、利用者の名乗りについては、「ハンドル」「半匿名」といった観点や、あるいは「本名」など様々ではあった。利用者が自らをどのように称し、ときにはその名前を変更しながらコミュニティの文脈を使い分けているのかという観点の研究は、長期間にわたってIDと名前の紐づけがなされたデータの提供によって、初めて可能になったと言えるだろう。

3. オンラインコミュニケーションにおける名乗り

3.1 仮名と匿名

オンラインのコミュニケーションにおいて、利用者同士が自分自身を相手に示す「名乗り」には、二つの要素がある。一つには、実在する本人が「誰であるか」を特定する本人到達性である。現実の社会生活や職業上で使っている名前(本名など)や、住所などによって明らかになる。一般に、「ネット上では匿名で書き込みをしている」と言う場合は本人到達性を秘匿している状態である。

もう一つは、複数の投稿や閲覧といった行為が同一人物によるものかを判断するリンク可能性である。たとえば、「匿名希望」という投稿が複数並んでいた場合、すべてが違う人物によるものか、いくつかは同じ人物によるものかを判定することはできないが、A・B・Cといった仮名を付与することによって、本人への到達性はなくとも、異なる投稿者うい識別することは可能になる。

この二つの要素を組み合わせれば、同一人物として他者と識別できる状態を「仮名」として、「匿名」と区別することができる(図1)。日本語における匿名とは、ペンネームなどの別名を含むとされるが、英語でのanonymityは名前が無いという意味で、偽名あるいは仮名を表すpseudonymityと区別される。ネット上の名乗りとは、この「仮名」を、実生活の人間関係と関連させるか切り離す

か、あるいは、同じ名前を使い続けるか、その都度変えるかといった選択の結果であるといえる。

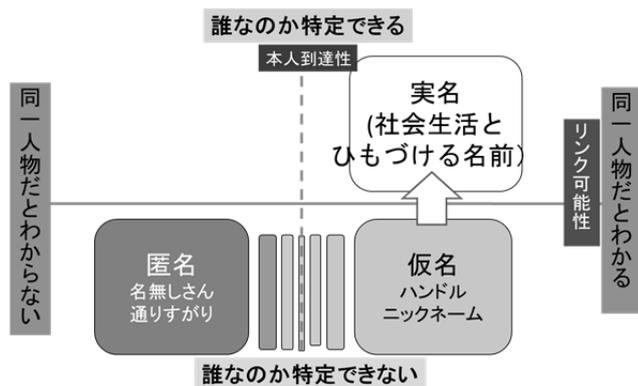


図 1 仮名と匿名

3.2 名乗り分け

実名、仮名および匿名はどのように名乗り分けられているのか。例えば、職業上使っている名前と切り離したり、何らかの名前で活動しているコミュニティと文脈を分けるといったことが考えられる。社会的な手がかりを減ずることによって、より自己開示が行いやすくなったり、相談しづらい内容を相談しやすくなったりといった効果もある [4]。2008 年に CGM (消費者生成メディア) 利用者を対象に行った調査 [5] では、回答者の半数以上が一貫して同じ仮名を名乗り続けており、一方で多様な CGM サイトに書き込みをする経験のある回答者の多くは、その都度仮名を変えていることがわかった。また、2010 年に読売新聞社の運営する大型掲示板「発言小町」の利用者を対象にした調査 [6] では、アクティブな利用者ほど、その都度名乗る名前を変更している傾向があった。

4. フォーラムにおける名乗りの傾向

4.1 心理学フォーラムにおける名乗り

本節では、ニフティにおけるフォーラムデータを対象に名乗りの傾向をみていく。前述したように、ニフティでは ID あるいは本名を初期値としつつも、利用者が自分で自由にハンドルを設定することができる。本稿では、ダイナミズムの分析を行った、心理学フォーラムデータを対象に、下記について探索的に明らかにする。

- アクティブな利用者は、どのように名前を名乗っているのか (一貫して同じもの、会議室内で変更、フォーラム内で変更)
- アクティブな利用者はどのような名前を使用しているのか (本名、ID、ハンドル)

4.2 対象データ

今回対象としたデータは、心理学フォーラムのアーカイブ

データから、ほぼ完全な形で抽出でき、かつ比較的長時間にわたって運用されてきた 6 つの会議室のログである (表 1)。これらのデータを、宇田ら [7] と田代ら [8] の方法を用いて csv 形式に変換し、投稿番号・レス先の番号・投稿者の ID とハンドルネーム・投稿日時・投稿本文が得られたものを使用している。

表 1 分析対象の会議室

会議室名	内容	総投稿数	総投稿 ID 数
プシケー	談話室	23200	1910
ハイパーどすこい心理学	心理学全般の質問・議論 (Q&Q)	3485	429
こころの病とその癒し	臨床心理学	16000	888
こころは社会の窓	応用・社会心理学	3759	330
からだところ	神経・生理心理学	3020	261
文明と心理学	境界領域	8855	318

4.3 結果

まず、各会議室において、投稿数の多い上位 50 名を「アクティブユーザ」とし、それぞれ利用者の名前の変更の有無と、名乗っている名前の内訳を調べた。ただし、ここで言う本名は、姓と名によって構成されており、日本人の氏名として不自然でないものであり、必ずしも戸籍上の姓名であることは保証していない。

まず、名前の変更の有無について図 2 に示す。

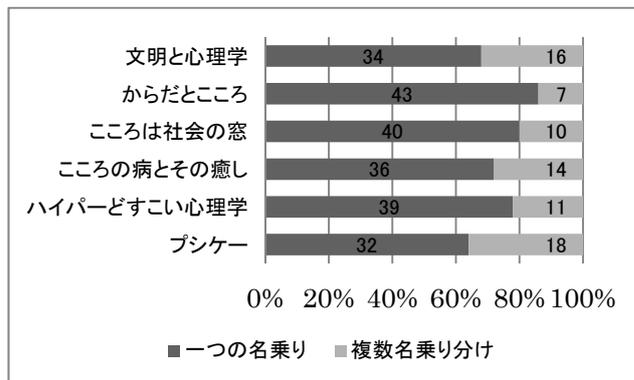


図 2 名前の変更

各会議室において、一つの名前を名乗り続ける参加者が多数であったが、参加者および投稿者数が顕著に多く活発なコミュニケーションがなされていた「プシケー」では、50

名中 18 名が複数の名前を名乗り分けて使っていた。プシケーにおける名乗り分けの内訳は次の通りであった。

- ・本名+本名に関連するハンドル：1 名
- ・本名+本名に無関係なハンドル：12 名
- ・複数のハンドル：5 名

これらの名乗り分けは、文脈の違いによって変更しているもののほか、参加している期間の長さや時期によって名乗り分けているものもあった。

また、複数の会議室にわたってアクティブユーザとして投稿している利用者は、それぞれの会議室における名乗りの傾向に変化はなく、単一の名前を一貫して使っているか、あるいは名乗り分けている名前のバリエーションを使っているかであった。

次に、一つの名前を名乗り続けている場合の内訳について、図 3 に示す。

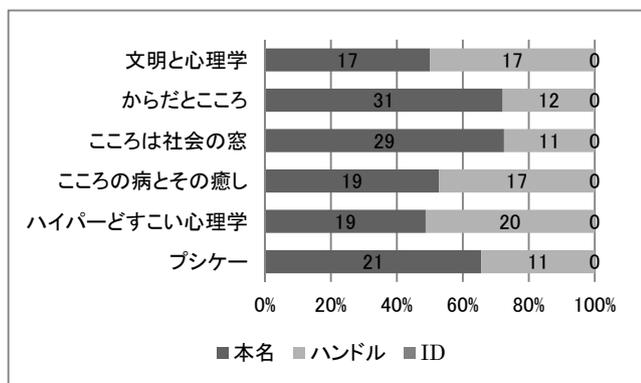


図 3 名乗りの内訳

いずれの会議室においても、ID をそのまま名乗っている利用者はおらず、本名あるいはハンドルを名乗っていた。専門性の高い「からだとこころ」(神経・生理心理学) および「こころは社会の窓」(応用・社会心理学) の両会議室においては、本名を名乗っているアクティブユーザの数が多くみられた。

5. まとめ

本稿では、心理学フォーラムのデータを対象に、ハンドルの名乗り分けおよびどのような名前を名乗っているかの内訳を探索的に調査した。長年にわたって運営されているフォーラムに蓄積された投稿データにおいて、トータルの投稿数上位のアクティブユーザを対象にその傾向を見た。その結果、本名による投稿が一定数ある一方で、名前を変えながら参加している利用者がいずれの会議室にも存在していることが分かった。

今後は、第一に会議室の投稿数の推移から見られる活発度合いと名乗りの傾向について、第二に話題ごとに移り変わるアクティブユーザのクラスタリングについて、彼ら/彼

女らの名乗りの傾向について詳細な分析を加えていきたい。

謝辞

本研究は、ニフティ株式会社様よりフォーラムのデータ提供をいただき実施したものである。本研究の一部は、科研費挑戦的萌芽(代表 三浦麻子 23653177)の助成を受けている。

参考文献

- 1) インターネット協会:インターネット白書 2007, インプレス(2007)
- 2) fj の歩き方「アドレスは個人名でないといけないのか」
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~kyashiki/fj/arukikata/realname.html>
- 3) 三浦麻子,森尾博昭,折田明子,宇田周平,松井くにお,鈴木隆一,田代光輝:オンラインコミュニティで「社会知」は醸成されたか: NIFTY-Serve 心理学フォーラムの事例研. 第5回知識共有コミュニティワークショップ論文集, pp.51-60,2012
- 4) 折田明子・三木草・小川美香子:発信しづらい情報交換における匿名性の効果〜ダイエット食品クチコミ調査から. 情報社会学会誌 Vol.2 No.2 pp114-127,2007
- 5) 折田明子:ネット上の CGM 利用における匿名性の構造と設計可能性. 情報社会学会誌 Vol.4 No.1,pp5-14
- 6) 折田明子,三浦麻子:ネットコミュニティの利用者の名乗りとアイデンティティ - 「発言小町」利用者調査分析 (2):利用姿勢と実名・仮名・匿名. 経営情報学会 2011 年秋季全国研究発表大会予稿集,2011
- 7) 宇田周平・三浦麻子・森尾博昭・折田明子・鈴木隆一・田代光輝・佐古裕 :NIFTY-Serve におけるフォーラムデータの分析と整形 第4回知識共有コミュニティワークショップ,2011
- 8) 田代光輝・鈴木隆一・松井くにお・宇田周平・折田明子・三浦麻子・森尾博昭: NIFTY-Serve におけるフォーラムデータの整形 第5回知識共有コミュニティワークショップ,2012